

<参考>

『人であふれた駐車場』 駐車場に人がたくさん

私は大学を卒業後、就職した会社をたった一日でやめました。
何のために働くのか、どうしても分からなかったのです。
その答えを見つけるために、自分で仕事を始めました。
わからないながらも必死で働きましたが、何かがうまくいきません。
いつも中途半端で、本気になれない自分がいました。
夢を持つことができないまま、ただ毎日を過ごしていました。
当時、私は事務所のある新宿まで、毎日車で通っていました。
近くの駐車場には、六十を過ぎたぐらいの管理人のおじさんがいました。
「おはようございます！ 今日天気でいい一日ですね」
おじさんはいつも明るい笑顔で、年齢に似合わずシャキシャキと仕事をこなしています。
ある日駐車場についたら、外はひどい土砂降りになっていました。
困ったなああと車から降りられずにいると、おじさんが走ってきました。
「傘忘れたんじゃない？ これ持っていきなよ」
「でもそれって、おじさんの傘でしょ？」
「私のことは気にしないでいいんですよ」
おじさんはいつもこんな調子で、お客さんのことばかり考えてくれる人でした。
駐車場は満車になることも多く、おじさんはいつも看板の前であやまっていました。
「満車です。申し訳ありません」
「やっと見つけたのに、困るんだよ！」中には文句をいう人までいます。
「本当に申し訳ありません…」
おじさんはいつも車が見えなくなるまで、少し薄くなった白髪頭を下げ続けていました。
ある日、いつもと同じように車を止めようとしたとき、おじさんの笑顔がないことに気づきました。
「実は今週いっぱい、この仕事をやめることになったんです」「え！？ どうしてですか？」
「妻が肺を患っているんです。空気のきれいな田舎で二人でのんびりと暮らすことにしました。これまで本
当にいろいろとお世話になりました」そういっておじさんは、深々と頭を下げました。
「お世話になったのは、こっちのほうですよ…」私は何ともいえない寂しさをおぼえました。
今日が最後というその日、私はおじさんへのちょっとした感謝の気持ちで、手みやげを持っていきました。
そして駐車場についたとき、信じられない光景を目にしたのです。
小さなプレハブの管理人室の窓からは、中がまったく見えません。
色とりどりの花束が積み上げられていたからです。
ドアの横には1メートル以上の高さになるほど、おみやげが積み重ねられています。
たくさん花束とプレゼントに彩られて、管理人室はまるでおとぎの国の家のように見えます。
駐車場の中は、たくさんの人でごった返し、あちこちから声が聞こえてきます。
「おじさん、いつも傘を貸してくれてありがとう！」
「あのと荷物運んでくれて、とても助かりました！」
「おじさんに、あいさつの大切さを教えてもらいました…」
人ごみの中には、笑顔のおじさんがいました。みんなが次々と、おじさんと写真を撮っています。おじさん
と握手をして、ハンカチで目を覆っている人もいます。
おじさんは一人ひとり目を合わせ、何度も何度もうなずいていました。
私は列の最後にならんで、おじさんと話す機会を待ちました。
「おじさんにはいつも感謝しています。毎朝とても気持ちよく仕事に取りかかることが出来ました」「いえい
え、私は何もしていませんよ。私にできることはあいさつをすることと、あやまることぐらいです。でも私は
いつも、自分が今やっている仕事を楽しまたい、そう思っているだけなんです」「仕事の最後の日、自分が
これまでどのように仕事に関わってきたのかをまわりの人が教えてくれる。
つまらない仕事なんかはない。仕事に関わる人の姿勢が、仕事を面白くしたりつまらなくしたりするんだ」。
私はそんなことを、おじさんから学びました。
働くすべての人が、働くことの本当に意味に気づき、輝いた人生を送るきっかけになりますように